山口市歴史民俗資料館展示協賛　山口県文書館資料小展示第8回　　2019．11/1(金)～28(木)
(休館：月曜･祝日･月末整理日)

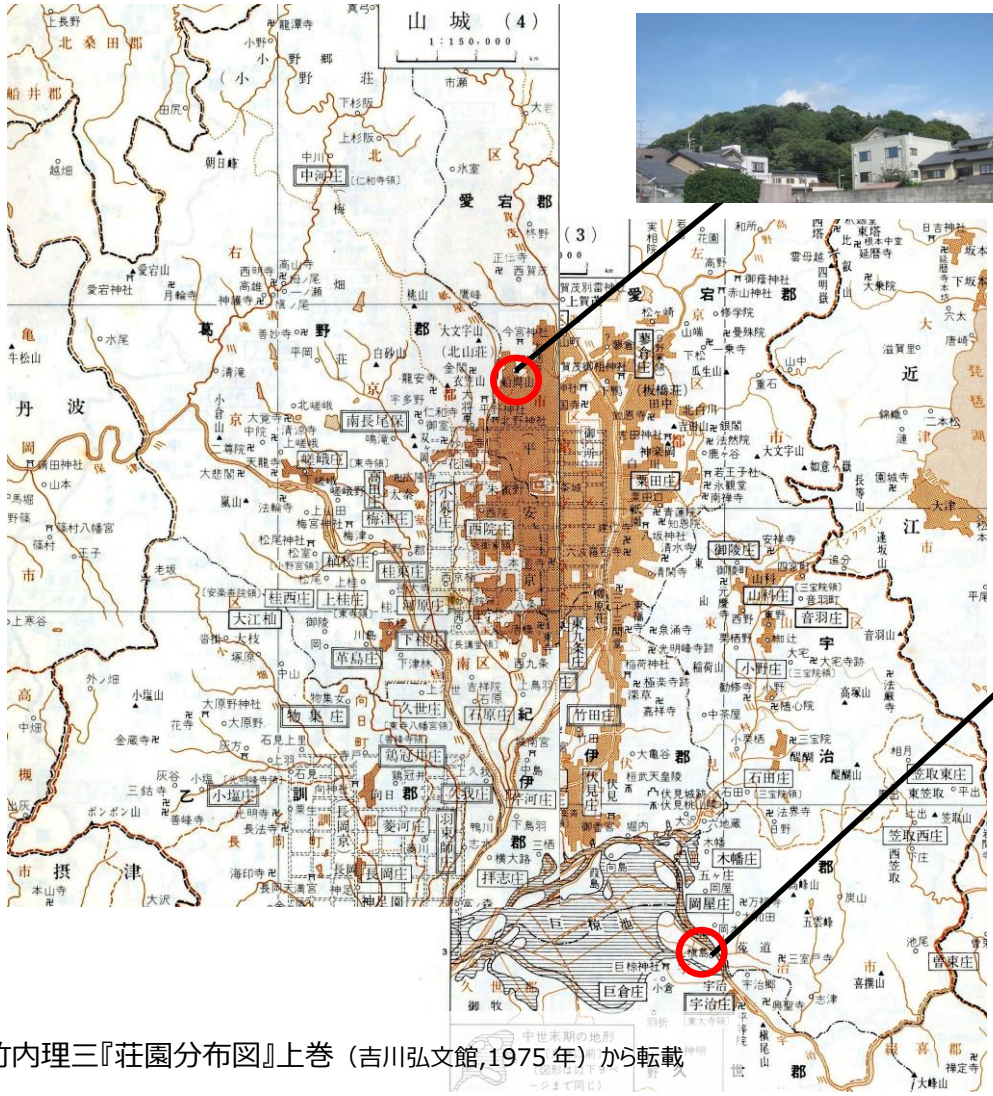
決戦！船岡山　～大内義興 天下分け目の戦い～

永正8年（1511）8月24日、船岡山（京都市北区）において、大内勢を主力とする将軍足利義稙側の軍勢と前将軍方の軍勢が戦います。わずか１日で決着がついたこの戦いは、いったん丹波国に逃れた義稙と義稙を擁する大内義興が再び京都を奪還できるかどうかという、彼らの今後の運命を大きく左右する天下分け目の戦いでした。この戦いの勝利によって、義稙・義興は前将軍方の勢力を京都から追い払い、政権を維持することができたのです。
本展示では，当館所蔵資料の中から船岡山合戦に関連する資料を紹介します。

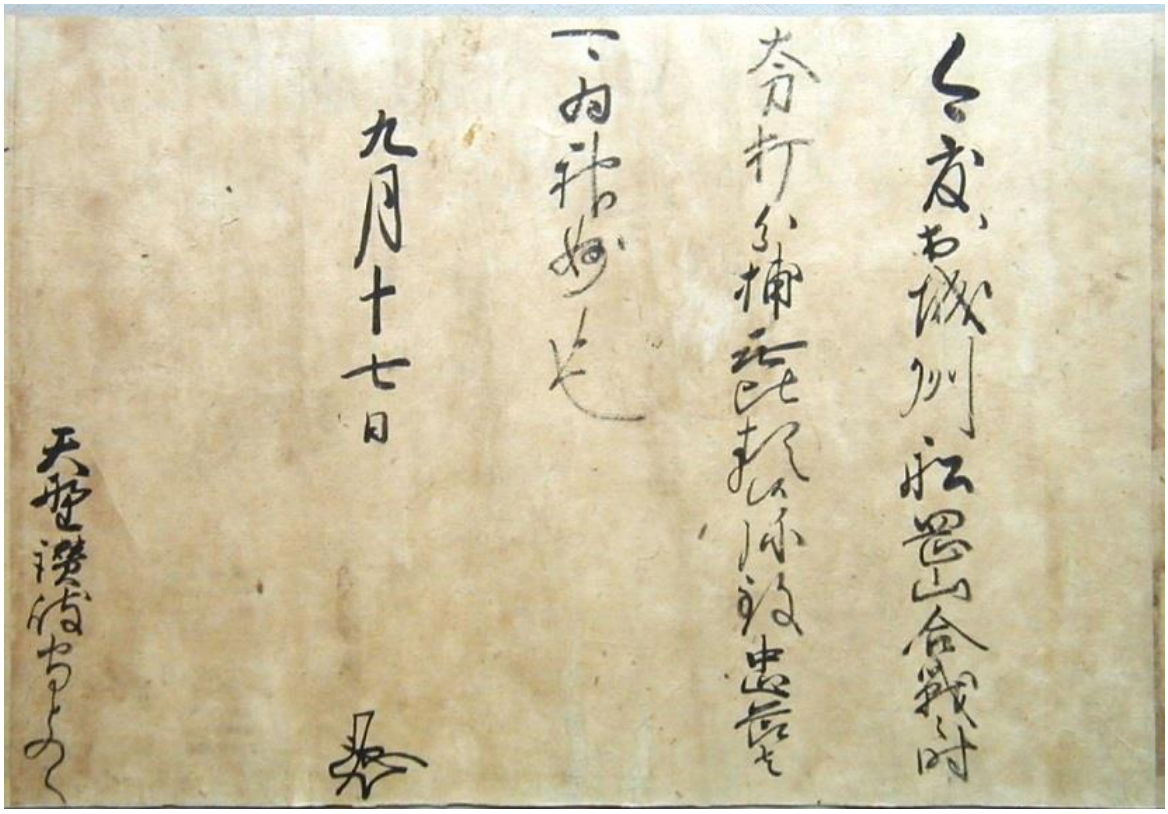
【展示リスト】

番号	史　料　名	請求番号	11/1～9	11/10～19	11/20～28
①	足利義稙御内書※	右田毛利家文書：複写資料275(1)	○		
②	大内義興副状※	右田毛利家文書：複写資料275(1)		○	
③	大内義興感状	浦家文書：複写資料105		○	
④	杉興宣副状	浦家文書：複写資料105	○		
⑤	大内義興感状	都野家文書：複写資料444			○
⑥	大内氏家臣連署奉書写	近藤清石文庫：複写資料273			○

※実物は、安芸高田市歴史民俗博物館「芸石国人高橋一族の興亡」展に貸出中です。



竹内理三『荘園分布図』上巻（吉川弘文館,1975 年）から転載



①　足利義稙御内書

縦31・0㎝、横44・5㎝　楮紙　右田毛利家文書

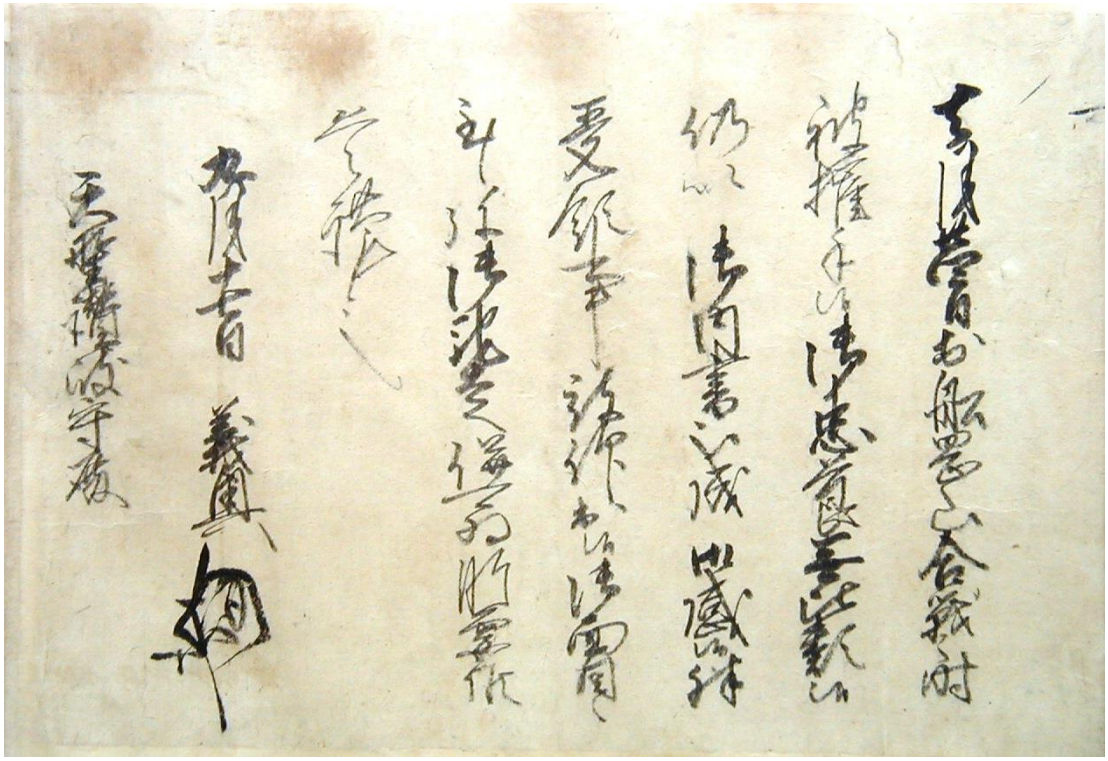
今度於城州船岡山合戦之時、
太刀打分捕無比類候、弥致忠節者、
可為神妙候也、
（永正八年＝一五一一年）　（足利義稙）
九月十七日　（花押）
（興次）
天野讃岐守とのへ

【大意】

このたび、山城国船岡山合戦のとき、太刀で攻撃し、あるいは敵を斃し頸を討ち取ったことは、くらべようのない働きである。これからも忠節をつくすならば感心なことである。

【解説】

将軍足利義稙（よしたね、一四六六～一五二三）が、天野興次に対して船岡山合戦における戦功を賞し、引き続いての奉公を求めたもの。「御内書」（ごないしょ）と呼ばれる形式の感状。三年前に大内義興の軍事力を背景に将軍に復帰した義稙は、永正八年（一五一一）八月十六日に競合する前将軍義澄方（義澄自身は同月十四日に死去）に京都を追われ丹波国（京都府）へいったん退いた。しかし、同月二十四日に大内軍を主力とする義稙勢は、丹波からの街道の洛中への出入り口にあたる船岡山で義澄方と激突し、多くの犠牲を払いながらも勝利し、京都を奪還した。天野興次は、安芸国賀茂郡志和東（東広島市）を本拠とする有力国衆で、義稙・義興に従って上洛、毛利氏や吉川氏ら安芸国の有力国衆が離反して帰国するなかで京都に留まり、船岡山合戦に参加した。



②　大内義興副状

縦28・0㎝、横41・3㎝　楮紙　右田毛利家文書

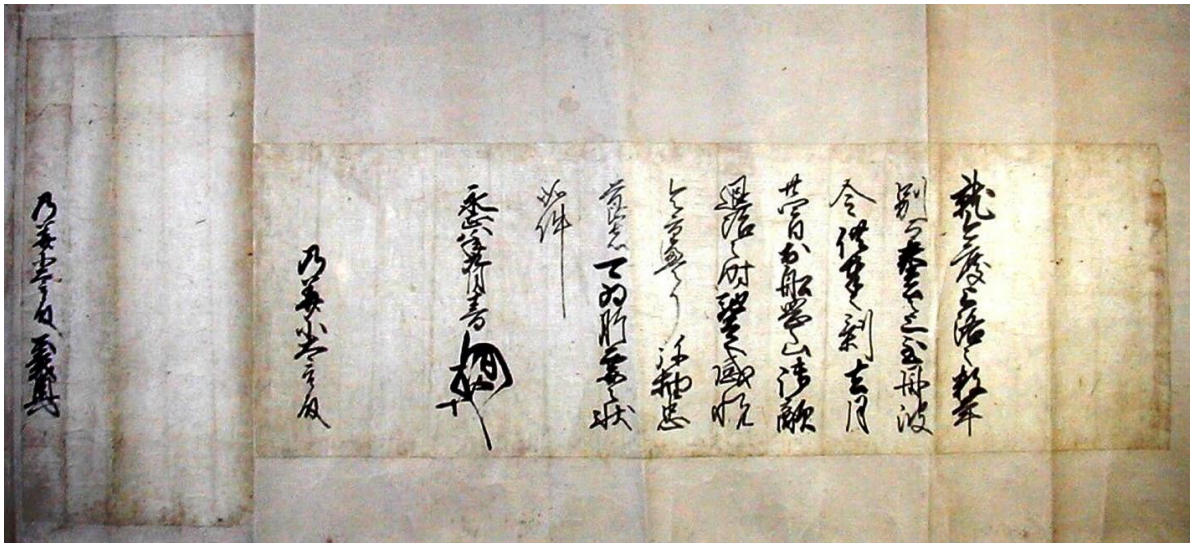
去月廿四日於船岡山合戦之時、
被摧手候、御忠節無比類候、
仍以　御内書被成　御感候、殊
受領事被仰出候、御面目之
至候、弥御馳走併可為肝要候、
恐々謹言、
（永正八年＝一五一一年）
九月十七日　　義興（花押）
（興次）
天野讃岐守殿

【大意】

去月二十四日の船岡山合戦のときの働きは立派である。そのため公方様（将軍義稙）があなたを褒める文書を出された。特に官職を授けると仰ったのは面目このうえない。これからも奉公に励まれることが大切である。

【解説】

大内義興（一四七七～一五二八）が、天野興次の船岡山合戦の戦功を賞した将軍足利義稙の「御内書」（史料①）に副えて出した文書。実質的な感状に相当するが、家臣ではない国衆の天野氏に対しては、家臣に対する文書（史料③）よりは厚礼な形式を持つ（書留文言が「恐々謹言」の書状形式／差出に花押だけでなく署名がある／宛所敬称の「殿」の崩し方等々）。この合戦に対する褒賞として天野興次に与えられた受領（国司の最上位。一般的には国守）は、具体的には宛所で使われている「讃岐守」。船岡山合戦や天野興次に関しては史料①を参照。



③　大内義興感状（切紙）

縦16・2㎝、横48・0㎝　楮紙　浦家文書

就今度上洛之、数年
別而奉公之上、至丹波
令供奉之、剰去月
廿四日於船岡山御敵
退治之時馳走、感悦
令重畳了、弥抽忠
節者可為肝要之状
如件、
（一五一一年）
永正八年九月十三日　（大内義興）（花押）
乃美小太郎殿

（封紙ウハ書）
「乃美小太郎殿　義興」

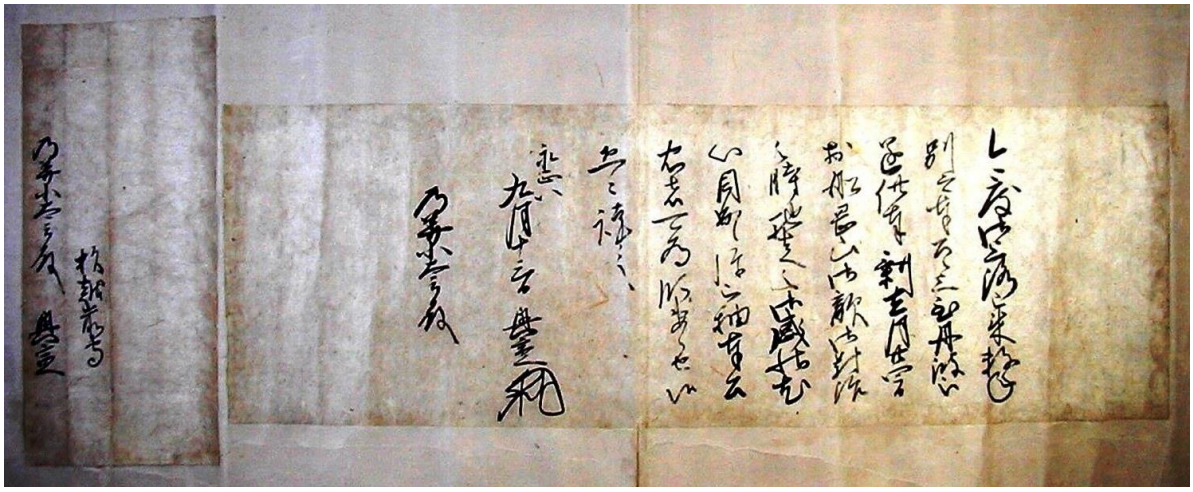
※縦25・7㎝、横13・0㎝

【大意】

このたび上洛以来数年奉公したうえに、丹波に供をし、去月二十四日の船岡山合戦のときの働きは、くりかえすも喜ばしいことである。これからも人一倍忠義を尽くすことが大切である。

【解説】

大内義興（一四七七～一五二八）が、家臣の乃美小太郎の船岡山合戦の戦功を賞した文書。典型的な感状で、家臣ではない国衆の天野氏に対して出した文書（史料②）と比べると薄礼な形式を持つ（書留文言が「如件」の直状形式／差出が署名がなく花押のみ／宛所敬称の「殿」の崩し方等々）。乃美氏は安芸国豊田郡乃美郷（東広島市）を本拠とする小早川氏の一族で、当時は大内氏の家臣となっていた。船岡山の戦いに関しては史料①を参照。



④　杉興宣副状（切紙）

縦15・8㎝、横46・3㎝　楮紙　浦家文書

今度御上洛已来、数年
別而奉公之上、至丹波被
遂供奉、剰去月廿四日
於船岡山御敵御対治
之時、馳走之御感状、尤
以目出候、弥被抽奉公
忠者可為肝要之由候、
恐々謹言、

永正八（一五一一年）
九月十三日　　興宣（花押）

乃美小太郎殿

（封紙ウハ書）
「　杉越前守
乃美小太郎殿　興宣　」

※縦22・0㎝、横10・2㎝

【大意】

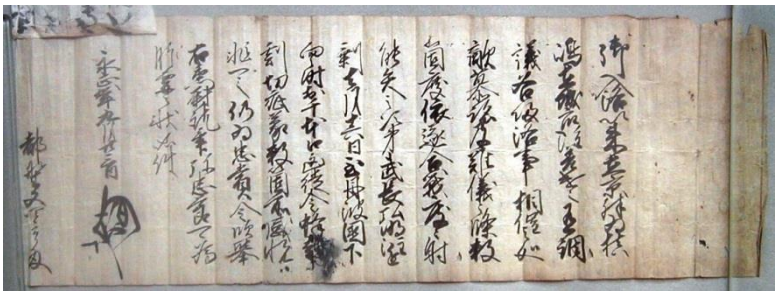
このたび上洛以来数年奉公したうえに、丹波に供をされ、さらに去月二十四日の船岡山合戦のときの働きに対して、主君からお褒めの文書をいただいたことは目出たいことだ。これからも人一倍忠義を尽くされることが大切である。

【解説】

杉興宣が、乃美小太郎の船岡山合戦の戦功を賞した主君大内義興の「御感状」（史料③）に副えて出した文書。杉興宣は、大内氏の有力家臣で、代々小次郎・次郎左衛門尉を名乗る杉氏の一派。彼は、当時大内氏の分郡であった安芸国東西条の代官（郡代＝分郡守護代）として、乃美氏等を統率する立場にあった。乃美小太郎は杉興宣の指揮下で船岡山合戦に参戦したものと考えられる。

⑤　大内義興感状（切紙）

縦16・3㎝、横47・6㎝　楮紙　都野家文書



御入洛以来在京、殊為槙
島在城衆雖差遣之、有調
議各帰洛事相催之処、
敵慕跡及難儀之条、数
箇度依遂合戦、度々射
能矢之次第、武長（弘中）・弘明注進、
剰去月十六日至丹波国（山城国）下
向候時、於千本口（山城国）凶徒令蜂起之
刻、切疵蒙数箇所、感悦
非一之、仍為忠賞令吹挙
右衛門尉訖畢、弥忠節可為
肝要之状如件、
永正八年（一五一一年）九月廿三日　（大内義興）（花押）

都野又四郎殿

【大意】

上洛以来在京し、特に槙島城から撤退する際に奮戦したうえに、八月十六日に丹波国に下向する際に千本口で敵と戦い数箇所負傷したのはこのうえなく感心なことだ。その褒美として右衛門尉に吹挙したので、これからも忠義を尽くすことが大切である。

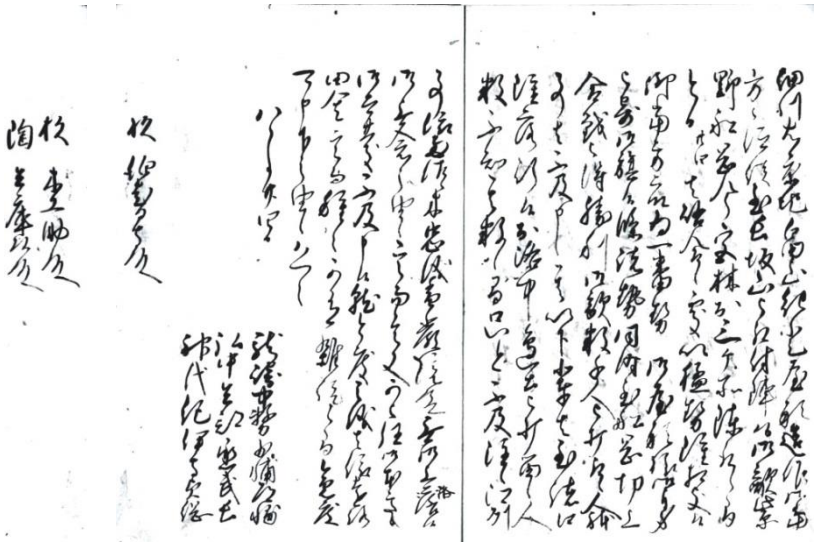
【解説】

大内義興（一四七七～一五二八）が、都野又四郎の上洛以来の戦功を賞した文書。船岡山合戦に先立ち形勢不利になった大内勢が、山城国上三郡支配の拠点であった槙島城から撤退する際や、さらに義稙に従って丹波国（京都府）に逃れる際に、洛中の千本口をはじめ諸所で敵の襲撃を切り抜けたことがうかがえる。都野氏は石見国那賀郡都野津（島根県江津市）を本拠とする石見国人で、当時は大内氏の家臣となっていた。

⑥

大内氏家臣連署奉書写

縦23・3㎝、横16・5㎝　楮紙　近藤清石文庫



急度被差下飛脚候、抑今度被開京都
至丹波御動座之儀、諸家被仰談次第、
御武略一段之儀候処、如案御敵細川典廏（政賢）・
同刑部少輔殿（和泉守護殿号上屋形）・三上兵庫助・
三宅出羽守・九里六郎次郎・遊佐河内入道
印叟・山中遠江守・荻野弥十郎・赤沢
孫次郎・竹内孫三郎（九里弟）以下、為人躰
以一万五六千上洛候間、去廿三日
公方様（足利義尹）如高雄被寄御陣候、細川房州（山城国葛野郡）（政国）
当細川殿御親（父）其外奉公衆悉被遂供奉候、
細川右京兆（高国）・畠山能登屋形（義元）造作・御当
方被仰談、至長坂（山城国愛宕郡）山被取付陣候、御敵紫
野・船岡・今宮林於三ヶ所陣取候間、
今日廿四者懸合（被イ）候処、以猛勢雖相支候、
御当方衆為一番勢　御屋形（大内義興）様御自身
被寄御旗候条、諸勢同時至船岡切上
合戦被得勝利、御敵数千人被打取候、人躰
事者不及申候、其以下輩者至諸口
雖落行候、於洛中辺土被打留候人
数不知其数候間、只今不及注候、江州

事、依両佐々木忠儀（六角・京極）、香厳院殿（足利義澄）無御上洛候、
御無念之由候、定而是又可被任御本意候、
御大慶不及申候、就今度之儀者、依遠路
田舎定而種々可有雑説候間、急度
可申下之由候、恐々、
（永正八年＝一五一一年）八月廿四日

龍崎中務少輔（マヽ）道輔
弘中兵部丞武長
神代紀伊守貞総

杉伯耆（重清）守殿
杉木工（弘依）助殿
陶兵庫（弘詮）頭殿

【大意】

このたび公方様（将軍義稙）が京都から丹波へお移りになったところ、細川政賢以下の敵一万五・六千人が上洛してきた。そこで公方様は二十三日に高雄に本陣を移され、味方の兵は長坂山に陣取った。本日二十四日に合戦となったが、わが大内勢は先陣を切って戦い、御屋形様（義興）御自身が出陣された結果、船岡山で勝利をおさめ、敵数千人を討ち取った。あちこちに落ち延びようとして洛中近辺で討たれた敵は数知れない。近江（滋賀県）にいた香厳院殿様（前将軍義澄）は、こちらに味方した六角氏と京極氏に阻まれて上洛できなかったとのことである。遠距離のため不確かな話がそちらに伝わることもあるだろうから、急いで知らせるようにとの仰せである。

【解説】

大内義興の有力家臣たちが、船岡山合戦当日に結果を国許の有力家臣たちに伝えた文書。前将軍義澄方の大将クラスの有力武将の名前やおおよその兵力、合戦前日からの敵味方両陣営の陣地、大内勢の奮戦ぶりを含む当日の様子などが記されている。「厳助往年記」によると、合戦前に丹波に退却していた時の義稙側の軍勢は合計一万五・六千人で、その内訳は大内軍が八千人、幕府軍は二千人、細川高国軍は三千人、畠山軍が三百人などであった。つまり、義稙勢の半数は大内軍であり、兵力といい、実際の働きといい、まさに船岡山合戦の勝利は大内軍の働きによるところが大きかったことがうかがえる。